

私たちと戦争

鹿児島玉龍中学校 三年 下山 真央

「私たちに戦争を教えてください。」

「いま会っておかなければいけない人がいる。」

「私たちに戦争を教えてください。」

「今日聞かなければいけない声がある。」

今年の夏休み、よくテレビで流れていたこの言葉。いま、最も人気があると言っても過言ではない俳優さんや女優さんたちが一フレーズずつ真剣なトーンで言っていた、ある番組の番宣だった。

今年、二〇一五年は戦後七十年の年。日本を含め、世界中の国が参戦した第二次世界大戦の終結を昭和天皇が自らの肉声でラジオを通して告げてからちょうど七十年が経ったのだ。今年は七十年目という事で多くの特別番組がテレビで放送されていた。そんな中で「若者に戦争について考えてもらおうとしているな」

と私は感じた。若者に人気のある俳優さんたちが実際に戦争を体験された方々のもとをおとずれ話を聞くと、という番組や、私たち十代向けの番組では戦時中の十代の生き方をリサーチしていた。キャスターなどの仕事もするアイドルが司会をする戦争について学べる番組や、たくさんさんのドラマや映画、アニメなどもあった。また、テレビ番組だけでなく、十代向けのファッション誌にも中高生の意見や専門家の人の意見が載っているページもあったのを私は見た。

確かに、普通にアナウンサーの方が司会をして、コメンテーターやジャーナリストの方の意見や解説を聞くことも勉強になるだろう。しかし、こういう番組より少しでも

「見てみようかな」

と思う若者は多いだろうし、私自身、そうだった。

鹿児島には知覧に特攻平和会館があり、私は何度か行ったことが

ある。特攻隊だった多くの方の遺書や遺品、写真などが展示されており、行きたびに悲しい気持ちになってしまう。その中には、まだ夢と希望で満ちあふれている若者の姿もある。私たちと同じ十代の方々がたくさんいて、国のためという強い気持ちを持ち、空へ飛びたつていったのだ。写真や遺書の文面からは、同じ十代だということ忘れてしまうほどの強い意志と、並々ならない覚悟が伝わってくる一方で、他の写真に目を移すとそこにはやはり中高生なんだと思わせてくれるような無邪気な笑顔が映っている。

いま、毎日同じ教室で授業を受けているクラスメイトが国のために自分の命を捨て、ある日突然空へと飛び立つ。私には想像できない。私はそのクラスメイトの姿を誇りに思い、見送ることができたのだろうか。ましてや家族だったら・・・もし、私が男子だったら特攻隊だと聞かされた時に何を一番最初に思うだろう。前日の夜は何を思い、遺書には何と残すだろうか。そもそも、飛行機に乗ることを決断できたのだろうか。想像するだけで涙がこぼれてしまうような現実が七十年前までのこの国にはあったということに改めて思い出させてもらえた一日だった。

なぜ、若者が戦争について考えるべきなのか。それは、これから日本を築き、になっていくのは私たち若者だから。私たちの祖父母でさえ戦時中にまだ幼かったり、産まれていないような時代になってしまい、私たちが戦争を最も知らない、戦争から最も遠い者になってしまったから。だからこそ私たちが若者がもっと知らないといけない。知りたいと思わなければならない。だからこそ私たちが若者が平和について考えなければいけない。誰よりも平和を願わなければならない。私はそう思う。

もう二度と同じ失敗をくり返さないために。もう二度と戦争が起きないようにするために。